

C I S M O R V O I C E 7

Autumn
2007

2-3

IIUM 共催シンポジウム

4-13

特集 テヘラン

テヘランと鈴掛の木

富田健次

テヘラン大バーザールの鼓動

ソレマニエ貴実也

ゾロアスター教の歩み

ヴァフマン

大学生のイスラーム

清水直美

フォトギャラリー

14-15

スタッフ紹介

16-17

研究会報告

18-19

CISMOR インフォメーション



C I S M O R

Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions

「一神教における救済と多元主義」

日時：2007年5月12日(火) 10:00-18:10

会場：同志社大学 今出川キャンパス 寧静館5階会議室

共催：同志社大学一神教学際研究センター、マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部

2007年5月12日、「一神教における救済と多元主義」をテーマに同志社大学一神教学際研究センター・マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部共催シンポジウムが開催された。

第1セッションではマレーシア国際イスラーム大学から、Hazizan Md. Noon 啓示人文学部学部長による「イスラームの一神教の核心とイスラームにおける救済の概念と多元主義の実践に対して持つその意義」、Hassan Ahmed Ibrahim 副学長による「前近代のイスラーム思想における単一文化主義と多文化主義 ―シャイフ・ムハンマド・イブン・アブドルワッハーブとシャー・ワリーユッラーの場合―」、Ibrahim Mohamed Zein 副学長による「イスラームにおける多元主義と不一致の倫理」、第2セッションでは日本側から、徳永道雄(京都女子大学名誉教授)による「浄土教における『救

済』の概念と『正覚』」、手島勲矢(同志社大学大学院神学研究科教授)による「改心の追求 ―ユダヤ教の構造と思想の一考察―」、小原克博(同志社大学神学研究科教授)による「多元主義モデルに対する批判的考察 ―『排他主義』と『包括主義』の再考―」の発表があり、第3セッションで総合討論が行われた。

総合討論では、森孝一同志社大学一神教学際研究センター長から、「それぞれの宗教の中に、共存を妨げる要素にはどのようなものがあるかを認識することが大切であり、キリスト教では『聖戦』、『伝道』のような概念が共存を妨げている要素としてあるが、イスラームやユダヤ教の中にもそれに対応するような概念があるのか、といった議論をしていくことが大切なのではないか」との提言がなされた。

(同志社大学大学院神学研究科教授 中田 考)



第1セッション 10:00-12:10

司 会：中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)

1. 開会挨拶
2. 発 表：Hazizan Md. Noon
(マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部学部長)
Hassan Ahmed Ibrahim
(マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部副学部長)
Ibrahim Mohamed Zein
(マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部副学部長)
3. コメント：小林春夫(東京学芸大学教育学部教授)
澤井義次(天理大学人間学部教授)
森 孝一(同志社大学大学院神学研究科教授)



第2セッション 14:00-16:30

司 会：中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)

1. 発 表：徳永道雄(京都女子大学名誉教授)
手島勲矢(同志社大学大学院神学研究科教授)
小原克博(同志社大学大学院神学研究科教授)
2. コメント：Hassan Ahmed Ibrahim
(マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部副学部長)
Ibrahim Mohamed Zein
(マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部副学部長)
Hazizan Md. Noon
(マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部学部長)



第3セッション 17:00-18:10

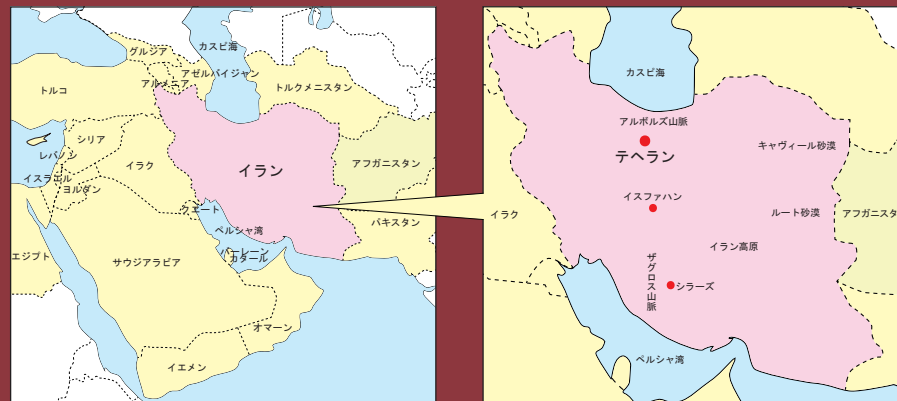
司 会：中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)

1. 総合討論
2. 閉会挨拶

テヘラン



(撮影：富田健次)



テヘランと鈴掛の木

テヘランは、京都とほとんど変わらぬ北緯 35 度に位置し、北に山、南に低湿地、北東に一際高い山がある、中東有数の大都市、イランの首都である。

北の山は標高 4000m 級の頂が連なるアルボルズ山脈で真夏近くまで雪が残る。その東方には、邦人たちがテヘラン富士と呼ぶ標高 5604m の火山ダマーバ

ンド山が聳え、翻ってはるか南方には、周辺の河川が流れ込みそして蒸発してできた塩湖が広がる。イランはイスラーム・シーア派の、そして特異な宗教的統治体制の国であるが、この宗教的統治体制イランの奥の院とも言うべきシーア派の中心地宗教都市ゴムはこの塩の湖の南にある。



アーザーディー・タワー

写真提供：在日イラン・イスラーム共和国大使館



塩の湖（ダルヤー・チェイエ・ナマク）遠望

(撮影：富田健次)



(撮影：富田健次)

雪をいただく山塊の扇状地麓に村や町と言った居住地が見られるのは、この西アジアから中央アジアのトルキスタン辺りにかけて良く見られるパターンである。冬の間に積もった雪は夏の強い光線で溶けて、伏流水となり扇状地の外れで天然の泉となって地表に湧き出る。テヘランでもその南郊にレイの泉がある。かつてこの泉を中心として出来たレイの町はモンゴル軍によって破壊されるまで、当地方の中心地であり、アケメネス朝ペルシアの帝王ダリウス三世を追跡したアレキサンダー大王が足跡を残したところであり、アッバス朝最盛期のカリフであるハールーン・アッラシード（在位 786-809）が生まれ、セルジューク朝の都がここに置かれた。しかし、モンゴル軍がレイの町を徹底的に破壊すると、殺戮を免れた人たちがその北郊外に難民集落を作った。やがてこれがレイに取って代わってテヘランとして発展することになった。現在はさらに北へ北へと広がっ

て、アルボルズ山脈の岩塊のすぐ麓まで町並みが広がっている。

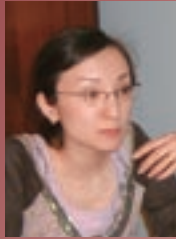
アルボルズ山脈の麓の北から南へと傾斜したテヘランの町のありふれた光景であるものの、何故か印象に残る風景の一つが、アルボルズの麓から南北に貫く大通りヴァリー・イェアスル通りに沿って、勢いよく駆けくんだり、往々にして街の生活ゴミも集めて流れる側溝の水、そしてこの側溝の中に根を張って目一杯に枝を伸ばし涼しい木陰と憩いを与えている鈴掛の街路樹の大木である。イラン革命時の騒擾、イラン・イラク戦争時のイラクのミサイル攻撃、そして、昨今は核開発問題や隣国イラクを巡る米国との確執などなど、この側溝の流れとよく似て世情は流れて留まることを知らないが、鈴掛の木はその中で遅しく生きるテヘランの人たちのシンボルかも知れない。

(同志社大学大学院神学研究科教授
富田健次)

テヘラン大バーザールの鼓動

ソレマニエ貴実也

イランカーション出身。14歳で来日、公立中卒卒業後、東京都立大学工学部建築学科に進学。修士課程修了後、千代田レーディング(株)に入社、更に中央大学総合政策学部兼任講師を務め、現在に至る。2003年10月より東京大学工学研究科建築学博士課程に在籍、建築史を専攻。



イラン・イスラーム共和国の首都テヘランは人口 650 万人を超えるイラン高原最大の都市である。地理的には、高原北を横断するアルボルズ山脈の麓に位置し、海拔 1100 メーターから 1650 メーターと山脈に向かう斜面に発達した都市である。

テヘランの名が歴史上に登場するのは11世紀初め、現在のテヘラン南に位置するレイの村落の一つとしてである。レイの歴史はサーサーン朝(224-642頃)

以前にさかのぼり、イスラーム進入後もたびたび歴史書にその名が登場する。その後レイがモンゴルの進入によって占領され廃墟になると、代わって豊かな土地を持つテヘランの名が登場し始める。しかし、都市として登場するのはモンゴルが去った100年も後、サファヴィー朝(1501-1736)二代目君主シャー・ターマーセブの時代である。彼はテヘランの気候と豊かな土地に魅了され、その周囲に城壁を廻らせた。これが都市としてのテヘランの誕生である。その後ガージャール朝(1796-1925)初代君主アガー・モハンマド・ハーンによって首都に選ばれ、パフラヴィー朝(1925-1979)そして現在に至るまでその地位を守り続けている。



今日のテヘランは城壁に囲まれていた旧市街の遥か北、アルボルズ山脈の山沿いに張り付くまでにスプロールし、何重にも交差するハイウェイとコンクリートの塊からなる高層建築の森に成長している。この都市はもう既にその古い記憶を捨ててしまったのであろうか。地方育ちの私は子供の頃テヘランが嫌いだった。人も車も多く、空気が汚い。これが私の印象だった。しかし、それから約 20 数年も経った 2004 年、ガー ジャール朝期に描かれた数枚の地図に出会った。城壁に囲まれたその内部に宮殿、商業施設、宗教施設、生活施設そして住宅までもが記されていた。これらを現在の地

図に重ねると、ほとんど変化していない
街区が存在した。それは、首都テヘラン
の経済的中心地の一つ、パーザールであ
る。パーザールには父に連れられて幾度
か足を運んでいた。しかし、私の記憶の
中には数百年の歴史を持つ建築群の絵は
無かった。

そこで、日本学術振興会助成、人文社会科学振興プログラムのひとつ「千年持続学・都市の持続性に関する学融合的研究」（代表：生産技術研究所助教授 村松伸）の一部として2004年夏からテヘラン旧市街の調査を開始した。第一回調査ではバーザールに焦点をあて、ガーニャール朝期の地図と現在の地図を比較し現存している施設の実態を明らかにした。

伝統的パーザールは中央のメイン通りとその両側に設けられる店舗列、そして隊商宿（キャラバン・サライ）からなる巨大商業空間であった。更に都市の大モスクや宗教施設なども建てられ、経済、宗教、政治の中樞がここパーザールにあった。

現在のバーザールの中心は、ガー
ジャール朝中期以降成長した旧バーザール
の西の区域（絨毯のバーザール等）で
ある。今日多くの人はこの西の区域のみ
で買い物を済ませ、バーザールを満喫し
た気分になって帰っていく。しかし調査
により、バーザール東側でも 1850 年代
の地図に描かれていた隊商宿 39 件の内
36 件が現存し、何らかの形で使用され
ていることが明らかになった。更に宗教
施設は 10 件中 9 件が現役であった。以
下にこれらサライもしくはキャラバン・
サライと呼ばれる、隊商宿の現状を紹介
する。

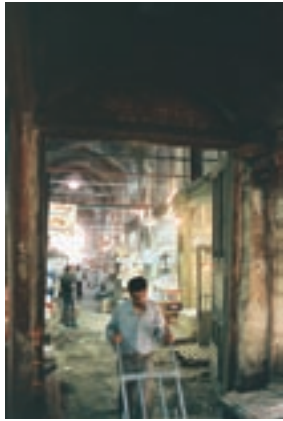
そもそもサライとはキャラバンの宿兼オフィスの空間であり、遠方から商品を運んできた商人たちが宿泊し、他の商人達と交渉を行う場所であった。これが正論であるが、当時の国勢調査にはサライに住まいを構えていた商人や聖職者の名が登場し、また工房として常時使用されていたことも記されている。サライの基本的プランは、ダーラーンと呼ばれるバーザールメイン通りから続く通路と諸室に囲まれた中庭から成る。

サライエ・ナバーブ
Sarā-ye Navvāb

最も基本的な形態のこのサライはパーザールから伸びるダーラーン（52m）と小さな中庭（25.5x14m）から構成され、1857年、1891年の地図および1852年の国勢調査に同じ名前 で記載されている。現在は麻製の袋と蜂蜜の卸売りを細々と行っているが、昔は油、チーズ、米などの食料品を扱っていたらしい。



中庭



ダーラーン

サラ・イエ・ゴルシャンシェカン
Sarā-ye Golshan-sheka

ダーラーン（32m）と大小二つの中庭（26x19 m、8.4x11.6 m）から成るこのサライは、敷地東に大通りが引かれたことによって人の往来が比較的多く、中庭中央に店舗を増築し、台所用品や日用品の卸と小売を手がけている。1857年、1891年の地図には単一中庭とダーラーンとから成るその姿が記されている。

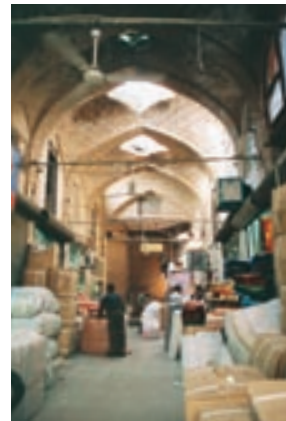


大中庭

サライエ・ハージハサン
Sarā-ye Hāji-hasan

旧バーザール地区の中で比較的西寄りのこのサライは、本来三本のダーラーン（第一ダーラーンは実測できず、第二ダーラーン 20.7 m、第三ダーラーン 56.4 m）と大小の中庭二つ（大中庭 34x25 m）から成る大規模サライである（近年大中庭南に更に中庭と店舗を増築中）。本サライも 1857、1891 年の地図に記されている。本来は紅茶や米等の食料品が主な取引商品であったが、現在は布地や毛布の卸売りが盛んに行われている。

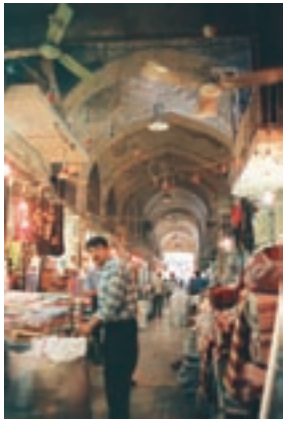
(次頁へ続く)



第1ダーラーン



第2ダーラーン



第3ダーラーン



大中庭

大学生のイスラーム

清水直美

東海大学文学部文明研究専攻博士課程後期満期退学。テヘラン大学文学部ペルシア語・ペルシア文学科博士課程修了。Ph.D.。現在、テヘラン大学外国語学部日本語学科講師。専門はイラン道徳文学。現在はイラン人の聖所信仰に関する調査をイラン各地で行っている。



繁華街を歩くカップル。流行のファッションに身を包み、手をつないで歩くことが普通になりつつある。

日本で目にするテヘラン発の報道とい
うと、98年のイラン・イスラーム革命
以来、狂信的な聖戦者グループが政権を
握り、テロリストを支援する国というス
タンスに立ったものが主流だった。しか
し、ここ数年は、イランの自由化の動き
の中でイスラームに反発し、否定しなが
ら欧米の文化に憧れる若者たちによる
西欧化とイスラーム離れという面を強調
したものが目につくようになってきてい
る。

こうした報道だけを見ると、狂信的なまでに信仰に凝り固まったイラン人と、イスラームを嫌い、否定するイラン人という二種類のイラン人がいるかのようである。もちろんこうした面を持つ人々もいるが、決してすべてではない。少なくともテヘランをはじめとする都市部においては、イスラームにあまり関心はないが否定もしないという人々や、真面目なムスリムではあるがそれを他人に押しつけることをしないという人の方がずっと多いように見える。

また、たとえイスラームに関心がないという人であっても、自分自身がムスリムであることを否定はしないし、イス



ショッピングモールでショーウィンドーをのぞき込む若い女性。夕方のショッピングモールは大学生くらいの若者でいっぱいになる。

ラームを捨てたいと積極的に思っているわけでもなさそうなのである。

私は10年以上、学生として、それから教員としてテヘラン大学の学生たちと接しているが、大学生活を始めたばかりの頃はやはり、私自身が彼らに持っていたステレオタイプなイメージと、実際に目にした彼らの言動があまりに異なっていたために、驚いたり感心したりすることばかりであった。

ムスリムにとって大切な義務であるはずの一日五回の礼拝をする学生は少数派であり、断食を完全に行う学生もやはり少数派である。はっきりと、「礼拝の仕方なんて知らない」と自慢げに言う学生すらいる。シーア派にとって最も重要な行事と言えるアーシュラーの行事すら、男女の出会いやデートの場のようになっている感すらある。ヘジャーブ（イスラームの規定に従った服装）を守っていない学生も多く、一見慎み深くチャドルをかぶっているように見える女子学生の中にも、明らかに異性の目を意識したファッションとしてチャドルを利用している学生がいたりする。モロッコやパキスタンなどからの留学生が、ことあるごとに「イラン人は本当のムスリムではない」「同じシーア派として恥ずかしい」と悪口を言っていたものであった。

確かに、一部学生たちの言動の表面を見ている限り、ムスリムとしての義務をしっかりと果たしている学生・留学生にとっては、彼らがイスラームを軽んじたり、無視したりしているようにしか見えないであろう。

しかし、こうした学生たちがイスラームを否定しているのかというと、必ずし

もそうではないように見えることも多い。礼拝の仕方も知らないと言う学生でも、よくよく話を聞いてみれば、大多数はイスラームの基本である創造者アッラーの存在と最後の審判は信じている。

また、ちゃらちゃらとしているように見える学生でも、バスの中でお年寄りに席を譲ったり、道路を渡るのを助けたりということもごく普通に行うし、町中にあるサダゲ箱（任意の寄付金を入れるための箱）に小銭を入れたり、道ばたの物乞いにお金を渡ししたりする姿も良く見られる。イラン社会が持つイスラームを基本とした倫理、「他人、特に自分より弱い人に親切にせよ」に自然と従っているのである。

一方、学生の中には昼休みには校舎内の礼拝部屋で必ず礼拝をし、断食期間中はきちんと断食をし、ヘジャブ規定をきちんと守るという学生もいる。大学内で定期的に募集されるオムレ（アラビア語のウムラ＝小巡礼）や第八代目エマーム・レザーの墓所を訪れるマシュハドへのツアーは、こうした学生たちによりいつも満員である。特定のエマームザーデ（エマームたちの子孫が葬られていると



サダゲ箱に小銭を入れる女性。街角に設けられたサダゲ箱に定期的に小銭を入れることを習慣にしている人は意外と多い。

される聖廟)にたいする信仰を持ち、定期的に訪れているという学生もいる。

しかし、宗教的に真面目だったとしても、そこはやはり大学生である。流行の音楽やファッションにも興味はあるし、異性だって気にはなる。

例えば、ある日、寮の友人の部屋を訪れると、彼女のルームメイトが部屋の片隅で行っていた礼拝が終わるやいなや「日本の学生はどうやって交際が始まるのか」「どこでデートをするのか」「そこからすぐに結婚に至るのか」から始め、かなりあけすけな質問を好奇心一杯に重ねてきた。こちらからも色々と尋ねてみると、男子学生と友人としてつきあうくらいはしたい、あるいはしているし、結婚に関しては、相手の人柄が分かる程度には結婚前に交際期間を持ちたいと思っているなど楽しそうに話してくれた。礼拝は心を清らかにするためのものであって、しないと落ち着かないと言い、断食もできるだけはするけど無理はしないという。

ごく普通に信仰上の規定を守る学生が、ムスリムとしての義務を全く無視しているように見える学生を快く思っていないのではないかと考えていたのだが、実際には、「別に？」だそうである。信仰はあくまで個人の問題であるということとで互いに干渉することなく、クラスメートとして、友人としてごく当たり前の関係を築いている。

では服装や行動が非常に「自由化」された学生はどうなのかというと、こちらにも「別に？」だそうである。あなたも礼拝をしないで、ヘジャーブをちゃんとしないで押しつけられたら嫌だけど、個人的に宗教的なだけでいい人であるのなら友人になるのに何の問題もないとのことである。

こうした考え方を持っているからであ
ろうか。多くの人は私のような啓典の民
ではない仏教徒に対しても、神を信じて
いるならそれでいいんじゃない？ 偶像崇
拝じゃないんでしょ？ と言って割とすん
なり受け入れてくれる。神の存在を信じ
ていていい人であるのなら、そこへ至る
までの道筋が多少くらい違っていても構
わないのだそうだ。こうしたある種柔軟



街にあふれた道徳的プロパガンダの一つ。「礼拝を軽んずる人は決して取りなしをしてもらえない」

な考え方というのはとても興味深い。

革命後世代である大学生たちは、小学校からずっとイスラーム教育を受けているはずだが、そうした教育からの影響は意外と大きいものではないように見える。

彼らは学校で宗教（イスラームしか教えられていないが）、コーランを読むためのアラビア語を必修科目として勉強してきている。これらは大学受験科目ですらあり、大学の一般教養科目もほとんどがイスラーム関連科目である。学校の外でもテレビをはじめとする様々なメディアが「正しいムスリムであるためにどうあるべきか」というプロパガンダを、これでもかというくらいに行っている。

そんな環境で育ったはずの大学生たちではあるが、彼らは「別に政府があればいいと言わなくとも私たちはムスリムだし、いい生き方をしたいと思う」とのこと。礼拝をしなかりと、断食をしなかりとその人の人間性によって、つきあうことができるかどうかは判断したいということのようだ。

信仰の形式よりも優先される「良く生きること」や「優れた人間性」とはどのようなものなのだろうか。定義に個人差があって一口で言うことはできないが、最大の共通項は「人に親切にできること」であり、これに続くのが、「嘘をつかないこと」「約束を守ること」であるようだ。

また、たとえ今は信仰を見失っているように見える人でも、いつか目覚めるかもしれないし、誰が正しかったかというのは最後の日にしないと分からないのだから、あまりあれこれ言いすぎても、

という人もいた。

礼拝をしなくとも、ヘジャーズが守られていなくとも、こうした彼らの基準による「良い（生き方をしている）人」を受け入れることにはためらいがない。そうした考え方は人間に対してだけではなく、様々な場面でも見られる。その良く言えば柔軟な学生たちの行動の最も顕著なものが、西欧キリスト教文化を取り入れることにさほど抵抗がないということである。

クリスマスツリーやリースを飾り、バレンタインを祝い、カードやプレゼントのやりとりをしたりパーティーをしたり。一部の学生はそうした行動に眉をひそめるが、宗教的に真面目であってもこうした行事をそれなりに楽しむ学生は確実に増えている。

少々都合主義な感もあるが、「他に干渉せず柔軟に」という学生たちを見ると、彼らに貼られている「狂信的ムスリム」というイメージが偏見や思いこみでしかないことを実感するのである。



ショッピングモールにさりげなく飾られたクリスマスツリー。こういった「西欧文化の象徴」のようなものが当たり前になり、街で見られるようになってきている。



近年大バーザールまで引かれた地下鉄は多くの買物客の足となっている。(撮影：ソレマニエ貴実也)



バーザール西、サブゼメイダーン南には生活雑貨や土産品が豊富に並ぶ。(撮影：ソレマニエ貴実也)



バーザール東にはガージャール以前からの古いサライが多く、現在は問屋や工房として利用されている。(撮影：ソレマニエ貴実也)

ドーラト門。現存するガージャール朝期の城門。現在の門は1906年に改築されたものである。(撮影：ソレマニエ貴実也)



タジリシ市場 (撮影：ソレマニエ千葉)

マーク・ジョーギンスマイヤー

6月末に起こったグラスゴー空港でのムスリム活動家グループによる攻撃と、その前に失敗に終わったロンドンのナイトクラブ近くでの車の爆破は、驚くべき事実をいくつか含んでいる。それには、高度な技術を持つ中年の医師が関与し、国外追放されイギリスに在住するムスリムにより作られた分散的計画も絡んでいた。これらの事実は、ジハードという運動が単独のテロリスト集団によるものではなく、グローバル化された世界における社会的な混乱と疎外化という大きな力への応答としての社会的運動であることを示唆している。

※日本ではマーク・ユルゲンスマイヤーと紹介される場合もあるが、正しくは、マーク・ジョーギンスマイヤーである。



キム・ヒョプヤン

2007年4月、私はCISMORの客員フェローに任命されました。これは、私にとって大変名誉なことです。また、5月にはCISMORを訪問し、東アジアのキリスト論について発表しました。私たちのコンテキストの中で新たにイエス・キリストを考えようとする私自身の大胆な考えを、東アジアの学生や神学者達と分かち合い、意見の交換ができた、ひじょうに刺激的な研究会でした。私は、このような名誉あるお招きと温かいもてなしをいただき、同志社大学、とりわけ森孝一教授とCISMORのスタッフに心より感謝いたします。

同志社から帰ってから、私はハーバード大学の社会生物学者、エドワード・ウィルソン氏によって考案され、現在韓国の学界で急速に広がっている「知の統合」(consilience)という概念を批判する論文を執筆しました。夏には、儒教・道教との対話の中での三位一体についての東アジア的な教義を明確に表す論文を執筆する予定です。これは、ケンブリッジ大学出版局から出る*Cambridge Companion to the Trinity*の1章となります。秋には、キリスト教と儒教という伝統における、とりわけ韓国のコンテキストでの、世界平和構築への障害を考察する論文に取りかかります。これはCISMORの出版物に掲載される予定です。



ミシェル・モール

宗教学を「仕事」とすること自体は変わっている。しかし、精神的な追究こそが今の混乱の時代に欠かせない。教育現場などでその必要性を訴えるのは、私の使命だと益々感じている。

ところが、私は少年時代から学問を目指したわけではない。生まれ故郷のスイスでは、むしろ学校教育のやり方に反抗する時期が長く、大学に入るとき「仏教」を教える授業の存在を知り、従来の精神的な渴望と勉強の接点を初めて見つけた。それから30年間、東洋思想の研究に没頭できる機会に恵まれ、ほぼ20年間日本に滞在した。

今はハワイ大学で「日本の宗教」を担当する任務を与えられている。ここは稀なほどアジア系の学生が多く、「特定の文化や環境に依存しない普遍的な真理とは何か」を問いつづけるにはふさわしい環境である。これから一層京都におられる皆様と建設的な議論を交わしていきたい。



部門研究 1・部門研究 2
合同研究会

第1回研究会 (2007年5月19日)

場所:同志社大学今出川キャンパス
寒梅館6階大会議室

「イスラーム革命、イラン・イスラーム共和国と米・イラン関係問題の根本」

松永泰行 (同志社大学研究開発推進機構客員フェロー)

イラン・イスラーム革命から現在に至る米国とイランの係争の関係の背景を読み解くことが、松永氏の発表の趣旨であった。

米国側がイランに対し実効性の高い制裁措置を年々積み重ねている。米国のイランに対する制裁的措置の中で、とりわけインバウトの大きい例は、外交断絶(80年)、テロリスト支援国家リストへの追加



第2回研究会 (2007年7月21日)

場所:同志社大学今出川キャンパス
寒梅館6階大会議室

研究会テーマ

「共存を妨げるもの ―キリスト教の場合―」
「何が文明間・宗教間の共存を妨げてきたのか? ―『キリスト教世界』の創造と終末―」
小原克博 (同志社大学大学院神学研究科教授)
「『千年王国』とアメリカの使命」
森 孝一 (同志社大学大学院神学研究科教授)

小原氏は、「共存を妨げる本質的な要素とは何か」と考えるのではなく「ある要素がどのような状況で阻害要因として働くのか」というように考えていきたいと述べ、そのことに注意を喚起することから発表を始めた。

西洋では、最近ローマ法王・ベネディクト16世が「共存」を妨げるような発言を繰り返して世間を騒がせている。しかし、その思想的ベースは彼が枢機卿

(84年)、米企業による石油ガス部門への投資の禁止(95年)、対イラン金融制裁(06年)などである。その一方でイランは米国に対し、交渉しない、というスタンスを貫いている。ただし、二国間の間に外交的折衝が一切ないと見なすのは正しくない。例えば、債務上の懸念などは公式レベルで細かく調整された。

イランの外交政策に関してイスラーム革命の輸出など復興主義的あるいはシーア派的な感情(利害)が多くの政治行動に影響を及ぼしているように見えるが、基本的にこれらはレトリックであって、現実の外交・安全保障の領域においては、極めて合理的な判断がなされている。また、国内の意思決定プロセスは制度化されており、最高指導者ハーメネー師のガイドラインから逸脱できないシステムが完成されている。時折外交官の一部には、国是を無視して米国と交渉しようとする者がいる。ただし、ハーメネー師が米国との無条件の関係改善を許す可能性はないので、こうした報道に惑わされるべきではない。

米国のメディアは、イランに対してネガティブな報道を続けている。テレビでは根拠のない「イラン性悪説」が日々「イラン専門家」によって再生産されている。米大使館占領事件は未だにイランの悪しきイメージを形成しているが、実際にこの問題は法的には解決済なので、政策上の決定要因にはなっていない。ホロコースト否定に代表されるアフマディーネジャード大統領の放言は有名だが、彼は革命イデオロギーの産物であるポピュリスト政治家であるに過ぎず、イラン国家指導部の政策的コンセンサスからは懸け離れているので、注意が必要である。

米国の対イラン政策提唱者の間では、ハト派とタカ派の区分が容易である。前者はアメとムチを使い分けることでイラン側の態度の軟化を期待するもの



時代におこなった講演にすでに表れている、と氏は指摘する。その講演には「理性や人権といった本質的な価値や規範はすべて西洋キリスト教世界の占有物である」という考えが表れている。これは、テロとの戦いを「Global Values」のためだと言ったトニー・ブレアの考えと共通している。両者はともに、自分たちのもっている価値こそ普遍的な価値であると考えているのである。

一方、日本では、19世紀以降に「文明化＝キリスト教化」というディスコースが問題になった。当然そ

であり、後者は出来る限り締め付けてイランの体制変革(転覆)を促そうとする立場である。だが米国が自らの政策的態度を根本的に改めない限り、いずれの方法を取ろうとも、イラン側の姿勢を変えることはできないだろう。

シーア派聖職者の強力なネットワークを考慮すると、米国がテロ組織と見なすヒズブッラーとの関係をイランが絶縁することは不可能である。また、核燃料サイクル計画もイラン側から停止する理由は見当たらない。イスラエルに対する攻撃的な態度もディスコースのレベルに留まるものとして理解しなければならない。米国がこうした理由でイランに圧力を加え続ける限り、外交的な行き詰まりを解消することは不可能である。ペルシア湾沿岸地方における安全保障論に関して言えば、イラン側の姿勢はディフェンシブなものであり、野心的な意図も準備も全く見えてこない。

最後に松永氏は、米国や日本のメディアはイランのイメージを現実的に報道する努力をすべきである、とのコメントを添えて発表を締めくくった。

(CISMORリサーチアシスタント・同志社大学神学研究科博士後期課程 原田恭介)



れに対抗する潮流も生じる。例えば島地黙宣は、文明とキリスト教を区別し、キリスト教なしに日本の文明化は可能であると主張した。また井上哲次郎は、日本的なものとキリスト教を区別して、両者は共存しえないと主張した。

それらの事例を踏まえて氏は、西洋における「キリスト教世界」という世界認識の形成について分析を進める。それは「イスラム世界」という認識と表裏一体の関係にあった。そして、そうした世界認識が、ムスリムなどの外部に対しても、ユダヤなどの内部に対しても著しく共存の可能性を損なってきたと言う。

また、キリスト教の創造や終末をめぐる言説も共存を妨げるものとして機能してきた。例えば、そこから「創造の秩序」という考えが生じ、それがナチズムやアパルトヘイト政策に影響を与えた。あるいは進歩的歴史観が生じ、それが序列的文明理解のもとでの優生学的な人種差別や民族差別を生んだ。

西洋の価値意識が優位しているという認識は、非西洋の視点に立つなどして相対化していく必要がある。しかし、そのみならず、創造や終末の言説

は公平性や希望の言葉として機能させることもできるのであって、そのような可能性を顕在化させる条件について考察していくことも重要である。氏はそのように今後の課題を示して発表を締めくくった。

森氏は、アメリカ外交と普遍的理念の関係を分析することから発表を始めた。ベトナム戦争時代の国務長官マクナ马拉は『回顧録』において「間違っていたのは戦略であって大義ではない」と言っている。プッシュもイラク戦争について同じことを言うのではないかとすれば、いま求められるのは、アメリカが大義として掲げる「普遍的理念」についての省察だと考えられる。

氏は、省察のための手がかりを、アメリカにおける外交と海外伝道の類似性に求めた。アメリカは米西戦争を境にして積極外交を展開していくが、その際に利用されたのが海外伝道のレトリックだった。アメリカの海外膨張はヨーロッパの植民地主義とは違い、世界を教育し文明化しようとする善意によるものだ、というレトリックである。

アメリカの理念を宗教的レトリックによって語るのは独立宣言以来の伝統であり、アメリカ建国の大義(啓蒙主義の理念、基本的人権)を戦争の大義とするのは現在のイラク戦争まで一貫して変わっていない。しかし同様な建国の大義をもつフランスは、アメリカと違って世界に対する使命感をもっていない

部門研究 3
「日本宗教から一神教への提言」研究会

第1回研究会 (2007年6月16日)

場所:同志社大学今出川キャンパス
至誠館3階会議室

「<日本の宗教学>再考 ―学説史から学問史へ―」
磯前順一 (国際日本文化研究センター准教授)

磯前氏は、日本宗教学の歴史を辿ることを通して、近代日本における「宗教」概念の社会的位相を考察した。

これまで日本の宗教学は、各大学の宗教学講座の歴史を扱った試みなどが若干あるものの、自らの歴史の全体像を叙述することは殆どなかった。この理由としては、宗教学という学問のもつ二重構造を指摘することができる。つまり宗教学は、宗教の固有性という理念と、そこに集まった諸宗教の具体的研究、という両者の往還過程の総体であり、それゆえに一枚岩な言説とは程遠いものであった。このために宗教学の全体像は、学会内外の研究者から極めて見えにくいものとなってきた。



い。世界に対するアメリカの使命感はどこからくるのか。氏は、その源流はピューリタニズムにあると言う。

ピューリタンはニューイングランドをつくったが、ニューイングランドも一様ではなく、その両極には宗教的多様性を重んじるロードアイランドと、神権政治をおこなったマサチューセッツがあった。アメリカには、個人の信仰と社会の秩序、多様性と統一を両立させるという宿命的な課題があり、ニューイングランドはその宿命を表しているといえる。

そしてピューリタンは千年王国思想をもっており、それは「キリストの再臨」と「千年王国の実現」の前後関係によって前千年王国思想と後千年王国思想に分けられる。「前」をもっていたピューリタンは、キリストの再臨に備えるために、教会や社会、国家をピュリファイ(純化)することに専心していた。ところが、ジョナサン・エドワーズ以降はそれが「後」に変

わる。「後」においては、千年王国が実現した後にキリストが再臨すると考えられるので、それを実現する人間の努力が強調される。ここから千年王国を実現していくうえでのアメリカの使命という意識が生じ、関心が外に向いていったのではないかと氏は分析する。

千年王国思想にはまた、キリスト陣営と反キリスト陣営という二元論的世界観があり、それが独立戦争や冷戦においても作用した。今ではイランが反キリスト陣営としてイメージされている。現在の宗教右派は前千年王国思想にたっていたが、1948年のイスラエル建国によって変化してきた。イスラエル建国は、終末に近いという証拠だと考え、神の国を建設するには核戦争をも辞さない構えをみせるようになったのである。

では、そうしたアメリカの大儀や理念を克服するにはどうしたらよいのか。氏は、マサチューセッツの選民思想を批判してロードアイランドをつくったロジャー・ウィリアムズや、世俗的な形で選民思想を批判したリンカーンを例として挙げながら、その系譜を継ぐ必要性を強調して発表を終えた。

(CISMORリサーチアシスタント・京都大学人間・環境学研究科博士後期課程 藤本龍児)

る。宗教概念論は、宗教学の言説を歴史的、政治的文脈との関連で論じること、日本の近代化過程の問題として宗教学を研究対象に捉え直した。その結果、宗教学は歴史的産物として認識されるとともに、それがもつ政治性の問題が浮上することとなった。

日本の宗教学は今後、宗教概念のプロテスタンティズム中心主義や宗教学の政治性といった批判を踏まえた上で、従来の宗教概念とは異なるところで信仰世界を語りなおす試みが求められている。そうすることにより日本の宗教学史は、近代日本の西洋体験のあり方をめぐる考察へと開いていくことが可能となる。磯前氏はそのように今後の課題と展望を示して発表を締めくくった。

(CISMOR奨励研究員・総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程 小河久志)



2007年度活動報告

4月10日
一神教学際研究センター・神学部・神学研究科共催 公開講演会
「EUの安全保障政策とキリスト教」
イェルン・ティーセン(ドイツ連邦議会議員、独日議員連盟会長代理)
会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

4月17日-7月10日
英語インテンシブ・コース(前期)

5月8日
特別セミナー
「Christ as a Tao: An East Asian Christology of the Tao (Christo-tao)」
キム・ヒョプヤン(カンナム大学教授)
会場:同志社大学 今出川キャンパス 扶桑館2階 マルチメディアルーム1

5月12日
一神教学際研究センター・マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部共催
シンポジウム「一神教における救済と多元主義」
会場:同志社大学 今出川キャンパス 寧静館5階 会議室

5月19日
部門研究1・部門研究2合同研究会:研究会(1)
「イスラーム革命、イラン・イスラーム共和国と米・イラン関係問題の根本」
発表:松永泰行(同志社大学研究開発推進機構客員フェロー)

5月20日
特定研究プロジェクト2:研究会(1)
「velayat-e motlaqeh宣言から20年 ―ポスト・ホメイニー期における統治法学の理論と実践―」
発表:松永泰行(同志社大学研究開発推進機構客員フェロー)

6月6日
特定研究プロジェクト1:研究会(1)
「ホロコーストとキリスト教 ―カール・バルトとユルゲン・モルトマンを中心に―」
発表:森山 徹(同志社大学大学院神学研究科博士後期課程)

6月16日
部門研究3:研究会(1)
「＜日本の宗教学＞再考 ―学説史から学問史へ―」
発表:磯前順一(国際日本文化センター准教授)

6月27日
イラン・戦略研究センターと学術交流協定締結

6月30日
一神教学際研究センター・神学部・神学研究科共催 公開講演会
「アパルトヘイト廃止後の南アフリカと原理主義」
ディビッド・チデスター(ケープタウン大学教授)
会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

7月7日
一神教学際研究センター・日本オリエント学会共催 公開講演会
「アッシリア浮彫りに描かれた物語絵画 ―時間と空間表現の観点から―」
発表:渡辺千香子(大阪学院短期大学国際文化学科准教授)
会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

7月17日
一神教学際研究センター・神学部・神学研究科共催 公開講演会
「イラク政治におけるサドル派の動向」
発表:フアン・コール(ミシガン大学教授)
会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

7月21日
部門研究1・部門研究2合同研究会:研究会(2)
研究会テーマ「共存を妨げるもの ―キリスト教の場合―」
「何が文明間・宗教間の共存を妨げてきたのか? ―『キリスト教世界』の創造と終末―」
発表:小原克博(同志社大学大学院神学研究科教授)
「『千年王国』とアメリカの使命」
発表:森 孝一(同志社大学大学院神学研究科教授)

7月31日
カイロ大学オリエント研究所と*Japanese and Oriental Studies*発行

8月2-14日
シリア夏期研修プログラム

8月7日
特定研究プロジェクト2:研究会(2)
「イランと近代」
発表:モジュタバ・ザルヴァニ(テヘラン大学神学部助教授)

8月12-23日
イスラエル夏期研修プログラム

8月21日-9月2日
マレーシア夏期研修プログラム

10月2日-1月15日
英語インテンシブ・コース(後期)

10月6日
部門研究1・部門研究2合同研究会:研究会(3)
研究会テーマ「共存を妨げるもの ―イスラームの場合―」
「西欧社会は、なぜ自らの共生の道を閉ざすのか ―9.11以前と以後―」
発表:内藤正典(一橋大学大学院社会研究科教授)
「イスラームにおける共存を妨げるもの」
発表:中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)

10月20-21日
CISMOR国際ワークショップ2007
「イスラームと西洋 ―アメリカの外交思想を検証する―」
会場:新島会館

10月22日
同志社大学名誉学位贈呈記念講演会
一神教学際研究センター・神学部・神学研究科・アメリカ研究科共催
「21世紀における自由民主主義の将来」
発表:フランシス・フクヤマ(ジョンズ・ホプキンス大学教授)
会場:同志社女子大学 今出川キャンパス 栄光館ファウラーチャペル

2007年度活動予定

12月8日
第3回CISMORユダヤ学会議

編集後記

特集「テヘラン」、いかがでしたでしょうか。テヘランと深い関わりのある方々に執筆をお願いしました。国際政治のニュースからだけでは知ることの出来ないテヘラン、そしてイランにふれることができたのではないかと思います。

今回の特集の企画、それに執筆者の選定に関しては、富田健次先生(同志社大学神学部・神学研究科)にたいへんお世話になりました。この場をお借りして、御礼申し上げます。ありがとうございました。

さて、次号の特集では「ヨーロッパ」の都市を取り上げようと考えています。ただ、どの都市にするかで迷っています。魅力的な都市が多いので。もしかすると、複数の都市を扱う特集となるかもしれません。御期待下さい。(ネアン)

来訪者記録

日付	氏名	所属機関	国名
2007年			
6月8日	リチャード・フォーク	カリフォルニア大学サンタバーバラ校	アメリカ
6月30日	ディビッド・チデスター	ケープタウン大学	南アフリカ共和国
7月7日	渡辺千香子	大阪学院短期大学	日本
7月17日	フアン・コール	ミシガン大学	アメリカ
	ヒラルド・ハーシャーン	バイルート・アメリカン大学	レバノン
	ファーティマ・アッサーイグ	UAE大学	アラブ首長国連邦
7月18日	沼田貞昭	国際交流基金日米センター	日本

CISMOR事務局編集部
越後屋 朗 澤村容子 蜂須賀朋彦 藤川晶子 藤田敦子

発行 同志社大学 一神教学際研究センター(CISMOR)
〒602-8580
京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL 075-251-3972
FAX 075-251-3092
E-mail: info@cismor.jp
http://www.cismor.jp
編集 CISMOR事務局編集部
デザイン 有限会社真之助事務所
印刷 日本写真印刷株式会社



イランの旬の香り

私は春には必ずイランに帰る。私の夫の国イランの正月だからだ。イランの正月は春分の日で始まる。

ノールーズ(元旦)には家族が集まり、新年の飾りハフスィン(七つのSで始まる物)の前で祖父、母、親、兄弟、いとこ・・・が順々に新しい年が良い年であります様にと願いを込めて抱擁する。子供たちにはお年玉が配られ、ポケットに集まったお年玉を嬉しそうに見せあってはしゃぐ。一昔前の日本の正月によく似ている光景である。

ノールーズには魚料理とサブズィポロー(数種類のハーブの炊き込みご飯)をいただくのが習わしである。カスピ海の魚マヒセフィード(白い魚)が高級魚で、ヘルシャ湾で獲れる魚や養殖されているマスなどは、正月だけはマヒ(魚)扱いされない。まあ日本の鯛に相当すると言ってもいいだろう。

マヒは姿焼きとフライ、ムニエル等にする。姿焼きは腹に香り高いハーブを数種細かく刻み、ざくろペースト、塩などを混ぜて詰める。そしてオーブンで焼く。フライやムニエルはレモン汁、塩、サフランを魚にまぶし下味をつけておき、小麦粉をつけて揚げる。サブズィポロー(ハーブの炊き込みご飯)のサブズィとは野菜、ポローは白米ではなく、何かが混ざっているご飯のことをいう。ニラ、パセリ、香菜、ディルなどをみじん切りにし、インディカ米に入れて炊き込み、バターやサラダ油を入れゆっくり蒸らし、焦げ目をつける。サブジポローが炊けてくる時のにおいは、インディカ米の香ばしい香りにハーブの香りがミックスされ、健やかな食欲をそそる。

サブジポローとマヒで始まり、親戚や友人宅に新年の挨拶まわりをし、あっという間に12日が過ぎてゆく。13日目にはスィズダベダル(13日は外に出る)といって、家にこもって一年中魔が家にこもると言われ、必ず野外にでかける。4月初旬にあたるこの頃は、あんず、プラム、桃、サクランボなどの花が次々とほころび、白やピンクの濃淡がやわらかい新芽の緑の間に散りばめられ、大地の賛歌が奏でられる。

スィズダベダルが終わって、やっと通常の生活リズムに戻る。学校が始まり、勤め人も夫々の職場へと向かう。この頃には春の旬の野菜が市場に出回る。白く雪に輝くエルブルズ山脈を背にしたタジリシ市場はテヘランの北の台所である。近代的なショッピングモールと伝統的なベルシャの市場が不思議に同居しているタジリシには、テヘランのあちこちから客が集まって来る。スーパーマーケットには出ない山菜が旬の香りを競っている。夫々に効能もあるらしい。八百屋のおじさん達の声にも春の命の響きがある。ぶどうの葉もこの時期を逃すともう食べられない。ぶどうの若葉に豆、米、羊のひき肉、ハーブを包みじゅくりと干しプラムやざくろシロップで甘酸っぱく煮込む。愛する家族や親しい友人に初物をふるまうことは主婦の誇りなのである。夫の母から教わったイラン料理は日本から30数年前にきた嫁に着実に?受け継がれているのである。

(ソレマニエ千葉)



客をもてなすテーブル